弘前大学教育学部紀要　第130号：１～６（2023年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 130：１～６（Oct. 2023）

萩市立図書館所蔵の往来物資料について
―目的別と出版地域別の分類整理 ―

Investigation report on “OURAIMONO” documents of Hagi City Library possession:
A study based on the publication place and the purposeful classification analysis

郡　　千寿子*
Chizuko KOHRI*

要　旨

山口県の萩市立図書館に所蔵されている近世期版本の往来物資料について、調査した概要を報告した。和本のみの目録はなく、『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』[1)]『萩市立図書館所蔵　諸家旧蔵書籍目録』[2)]により調査し、調査対象に該当すると思われる近世期の往来物資料を選別した。加えて文献調査を実施し、考察検討のうえ分類整理した。総数では24本の近世期版本の往来物資料が確認された。目的別に分類してみると、教訓科往来が６本、社会科往来は所蔵がなく、語彙科往来が２本、消息科往来が４本、地理科往来が１本、歴史科往来が１本、産業科往来が２本、理数科往来が７本、女子用往来が１本という結果であった。出版地域別の分類では、江戸が10本、京都が３本、大阪が６本、萩が１本、不明が４本という結果であった。地理的に近い京都と大阪を合わせると９本となり、江戸の10本とほぼ同数に近いということになる。距離的に遠方である江戸の出版が比較的目立つという点が特徴であり、予想外の結果であったといえよう。すでに公表している島根県立図書館、鳥取県立図書館、米子市立図書館、山口県立図書館での調査結果との比較検討も行い、山陰地域の偏在状況や格差についてもグラフ化して提示した。

往来物の分布を通して、地域の教育的背景の格差や文化伝播状況などを解明することを目的としているが、瀬戸内海側の山口県立図書館と日本海側の萩市立図書館との相違も明らかとなった。総数は多いとは言えないが、調査の空白地帯であった山陰での調査結果として今後の基盤となり得る一報といえよう。

キーワード：山陰、山口、萩市、往来物、言語生活、地域文化、教育背景

１　研究の背景について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究[3)]をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のものが出版された。従来の往来物研究は、教育史資料という側面からなされてきたが、日本社会の近代化や人間文化形成に果たした役割や影響など、多くの未開拓課題が存在し、新たな視点からの活用が期待されている。

しかし、文献資料の基礎的研究をはじめとして、発掘も十分にすすんでいない現状にあり、そうした事情を背景に、東北地域の調査研究[4)]を発端に、東北地域と海域でつながり、近世期に関西とも文化交流など関係が深かったと予測される、北陸地域にも調査対象[5)]を拡げて研究成果を公表してきた。地域間格差や文化伝播事情など研究の進展を目指し、山陰地域の調査[6)]も開始しているが、本稿では山口県の萩市立

＊弘前大学教育学部国語教育講座
Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

図書館所蔵の資料について報告する。

2　調査方法

従来すすめてきた所蔵往来物の調査にならい、原則として、写本は除き、版本に限って成立時期や出版元を確認した。調査対象の資料それぞれについて、目的別と出版地別に分類整理して、地域ごとの特徴について今後考察検討したいと思うが、写本を除いたのには意味がある。本研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化を通して考えてみることである。写本は、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。

基本的に従来の調査手法を踏襲し、調査対象の往来物資料を厳選し、分類整理を試みた。文献資料の記載内容については、『国書総目録』[7]および『古典籍総合目録』[8]と『往来物解題辞典　解題編』[9]によって確認検討した。

3　萩市立図書館の目録と蔵書について

和本のみの目録はなく、『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』[1]『萩市立図書館所蔵　諸家旧蔵書籍目録』[2]により調査し、調査対象に該当すると思われる近世期の往来物資料を選別した。加えて文献調査を実施し、考察検討のうえ分類整理した。

該当の文献資料は、『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』においては23本が確認され、『諸家旧蔵書籍目録』においては３本が確認された。

「諸家旧蔵書」とは「増田家寄贈書籍」「熊谷家寄贈書籍」「杉家寄贈書籍」「玉木家寄贈書籍」「久保家寄贈書籍」「馬島家寄贈書籍」「赤川家寄贈書籍」「小幡家寄贈書籍」「繁澤家寄贈書籍」「妻木家寄贈書籍」「明倫館旧蔵書籍（和漢書の部）」を指しているが、目録を検討した結果、近世期の版本の往来物資料として確認した３本は、すべて熊谷家旧蔵の資料であった。

熊谷家の当主、熊谷萬吉氏は、長州藩御用商人熊谷五右衛門義敏の一子として萩今魚店に生まれた。万延元年７月父義敏が急逝した時にまだ幼少だったため、藩命によって小林三四郎が中継養子となった。その後、家を継ぎ、町会議員や県会議員として社会公共のために尽くしたほか、茶道や歌道にも通じていたという。目録には明治34年萩図書館の開館当時に寄贈されたものと、本家の東京高等師範学校教授（教育学）文学士熊谷五郎氏の旧蔵本のものが含まれているが、本稿で該当資料とした往来物資料3本は、目録記載の書名をあげると『証註、実語教・童子教』【174－11】『女式目』【174－12】『庭訓往来具註抄』【327－1】である。いずれも本家熊谷五郎氏旧蔵の目録部分に記されたものであり、教育学関係者の蔵書であったことは納得できる調査結果であるといえよう。

調査の過程で『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』の記載資料と『萩市立図書館所蔵　諸家旧蔵書籍目録』の記載資料が重複していることが判明した。『萩市立図書館所蔵　諸家旧蔵書籍目録』における該当資料３本は、『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』の23本に含まれていると整理でき、総数では23本の近世期版本の往来物資料が確認されたことになる。

目録上は、総数23本であるが、詳細な書誌調査を実施した結果、興味深い事実が判明した。目録上の調査に従えば、目的別分類では、教訓科往来が６本、社会科往来は所蔵がなく、語彙科往来が２本、消息科往来が４本、地理科往来が１本、歴史科往来が１本、産業科往来が２本、理数科往来が６本、女子用往来が１本ということになる。

ところが目録による調査を経て、実際に書誌的調査をした結果、新たな事実が判明した。理数科往来資料で1本とされた三冊本の『算法通書』【419－サ5】についてである。三冊のうち一冊は別の文献資料として整理すべきものであり、他の二冊とは本来、別の二種の資料とすべきであることが判明したのである。書名としてはいずれも『算法通書』であったため、三冊ワンセットの一本として目録に掲載されたのではないだろうか。うちの一冊は、別に印刷刊行された、大きさの若干異なる『算法通書』であった。二種の『算法通書』が、三冊本の一種のものとして誤解され、継承されてきたようである。判明の経緯等は後述するが、つまり、目録上における総数は23本であるが、正しくは24本と数えるべきであり、理数科往来資料が６本でなく７本とすることが妥当かと思われる。

『算法通書』を二種の２本と数えるとすれば、出版地域別の分類では、江戸が10本、京都が３本、大阪が６本、萩が１本、不明が４本という結果になる。地理的に近い京都と大阪を合わせると９本となり、江戸の10本とほぼ同数に近いということになろう。距離的に遠方である江戸の出版が比較的目立つという点が特徴であり、予想外の結果であったといえる。

すでに公表している島根県立図書館、鳥取県立図書館、米子市立図書館、山口県立図書館での調査結果との比較検討も行い、山陰地域の偏在状況や格差についてもグラフ化して提示した。往来物分布を通して、地域の教育的背景の格差や文化伝播状況などを解明することを目的としているが、瀬戸内海側の山口県立図書館と日本海側の萩市立図書館との相違も明らかとなった。総数は少ないが、調査の空白地帯であった山陰での調査結果として今後の基盤となり得る一報といえよう。

4　目的別分類についての調査結果

教訓科往来に分類した資料は6本であったが、『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』に記載された書名と分類番号を紹介すると『六輪衍義大意』【2甲4－57】『実語教・童子教』【2甲4－100】『実語教・童子教證註』【174－11】『童訓往来新大成』【375－ト3】『大全　童子往来』【375－ト5】『童子通』【2乙1－79】である。なお、『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』では、『大益　童子往来』として記載された【375－ト5】の資料は、書誌調査時に現物確認したところ、『大全　童子往来』との題名であることが判明したため、ここには訂正後の書名で示すことにした。

以下に同様に紹介していくが、社会科往来は所蔵が確認されなかった。

語彙科往来に分類した資料は2本で『首書註釈　五体千字文』【7丙1ロ－84】『三体千字文』【728－サ12】である。なお、『萩市立図書館　和漢古書蔵書目録』では、『首書註釈　五体千文字』と記載されていた【7丙1ロ－84】の資料は、書誌調査時に現物確認したところ、『首書註釈　五体千字文』との題名であることが判明したため、ここには訂正後の書名で示すことにした。同様に目録の題名『三体千文字』も誤りであり、【728－サ12】の資料も『三体千字文』が正しく、現物確認のうえ、書名を『三体千字文』と訂正しておくことにする。

消息科往来に分類した資料は4本で『庭訓往来諺解大成』【3甲1－97】『首書読法　庭訓往来具註抄』【327－1】『庭訓往来』【375－テ1】『消息文例』【816－シ2】である。

地理科往来に分類した資料は1本で『聖代御江戸往来』【812－2】である。

歴史科往来に分類した資料は１本で『日用重寶　童訓古状揃』【327－4】である。

産業科往来に分類した資料は２本で『農稼業事』【7丙5－50】『農具便利論』【7丙5－51】である。

理数科往来に分類した資料は7本で『算法学海』【6甲2－1】『気海観　廣義』【6乙2－19】『天文図解』【6乙4－6】『古今算法記』【419－コ2】『算法通書』『算法通書』【419－サ5】『算法新書』【419－サ7】である。

前述で紹介したが、『算法通書』として目録では三冊本で一書として登録されているようであるが、三冊のうち、「甲」のラベルが貼られた［419－5－1］［419－5－3］の資料が上下でセットのものである。ただし、完本でなく中巻が欠巻していることが調査により判明した。本来の『算法通書』は上中下の三冊揃本であり、残存の資料は、上下巻二冊（中巻が欠巻）と、下巻（上巻中巻が欠巻）であることを調査によって確認したものである。［419－4－2］は下巻のみの別本であり、大きさも若干違っている。

女子用往来に分類した資料は１本で『女式目』【174－12】である。

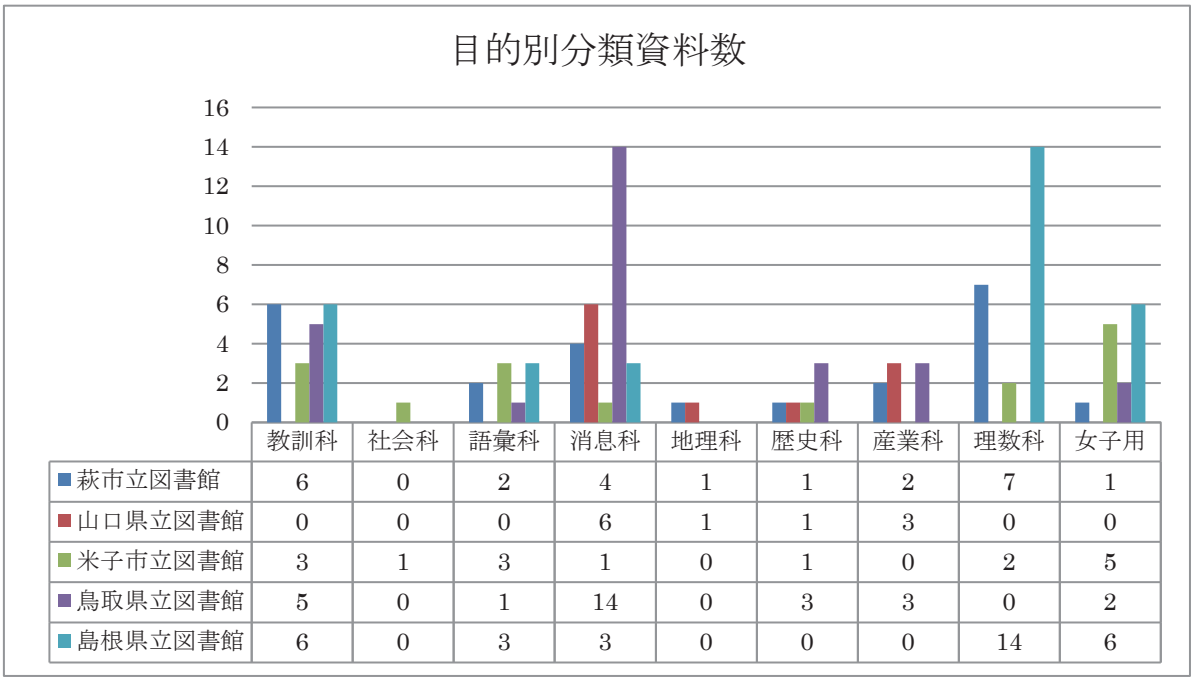
目的別分類では、最も多いのが理数科往来資料の７本で約29.0％を占めていることになる。次に多いのは教訓科往来資料の６本で25.0％である。次いで消息科往来資料の４本で約16.7％、語彙科往来資料と産業科往来資料はそれぞれ２本のため約8.3％ずつであり、地理科往来資料、歴史科往来資料、女子用往来資料はそれぞれ１本のため約4.2％ずつの割合という結果となる。

萩市立図書館所蔵資料は総数が24本であり、山口県立図書館所蔵資料の11本に比べると倍以上である。社会科往来資料は所蔵が確認できなかったとはいえ、そのほかの目的別の分類において多種の資料が確認できたことは大きな成果であり、また理数科往来資料が最多という結果も注目に値するといえるだろう。

北陸地域の調査結果[3)]によれば『庭訓往来』に代表される消息科往来の占める割合が大きい地域が多いという傾向にあった。目的別に分類した調査結果からみれば、一般的に多いとの印象がある消息科往来が多いことが北陸地域では確認できたといえる。一方、萩市立図書館では、理数科往来資料が最多であり、消息科往来資料は約16.7％とそれほど目立つ存在ではなかった。

他方、山陰地域[4)]との調査結果との比較でいえば、島根県立図書館と米子市立図書館は消息科往来が最多であった。鳥取県立図書館所蔵資料では理数科往来が最多であり、それぞれの偏在状況が明確になったといえるであろう。

【グラフ１】



	教訓科	社会科	語彙科	消息科	地理科	歴史科	産業科	理数科	女子用
萩市立図書館	6	0	2	4	1	1	2	7	1
山口県立図書館	0	0	0	6	1	1	3	0	0
米子市立図書館	3	1	3	1	0	1	0	2	5
鳥取県立図書館	5	0	1	14	0	3	3	0	2
島根県立図書館	6	0	3	3	0	0	0	14	6

上掲の【グラフ１】は、目的別分類資料数を近隣の鳥取県立図書館、島根県立図書館、米子市立図書館、山口県立図書館との比較を参考までにグラフ化して提示したものである。①教訓科往来　②社会科往来　③語彙科往来　④消息科往来　⑤地理科往来　⑥歴史科往来　⑦産業科往来　⑧理数科往来　⑨女子用往来の所蔵状況の地域間格差を示している。

５　出版地域別分類についての調査結果

出版地域別の分類によれば、江戸が10本、京都が３本、大阪が６本、萩が１本で不明が４本という結果であった。すでに公表している島根県立図書館、鳥取県立図書館、米子市立図書館、山口県立図書館での調査結果との比較検討も行い、山陰地域の偏在状況や格差についても【グラフ2】として後掲している。

江戸の出版である資料は、『実語教・童子教』【2甲4－100】『実語教・童子教證註』【174－11】『童子通』【2乙1－79】『三体千字文』【728－サ12】『庭訓往来』【375－テ1】『消息文例』【816－シ2】『気海観　廣義』【6乙2－19】『算法通書』『算法通書』【419－サ5】『算法新書』【419－サ7】の10本と整理した。

京都の出版である資料は、『首書読法　庭訓往来具註抄』【327－1】『算法学海』【6甲2－1】『古今算法記』【419－コ2】の３本である。

大阪の出版である資料は、『大全　童子往来』【375－ト5】『首書註釈　五体千字文』【7丙1ロ－84】『農稼業事』【7丙5－50】『農具便利論』【7丙5－51】の４本である。

萩として分類したのは『六輪衍義大意』【2甲4－57】の1本である。序文に「弘化四年丁未孟春　明倫館祭酒山縣禎謹題」と記され、萩藩校「明倫館」で作成され使用されたものと推測できる貴重な資料である。

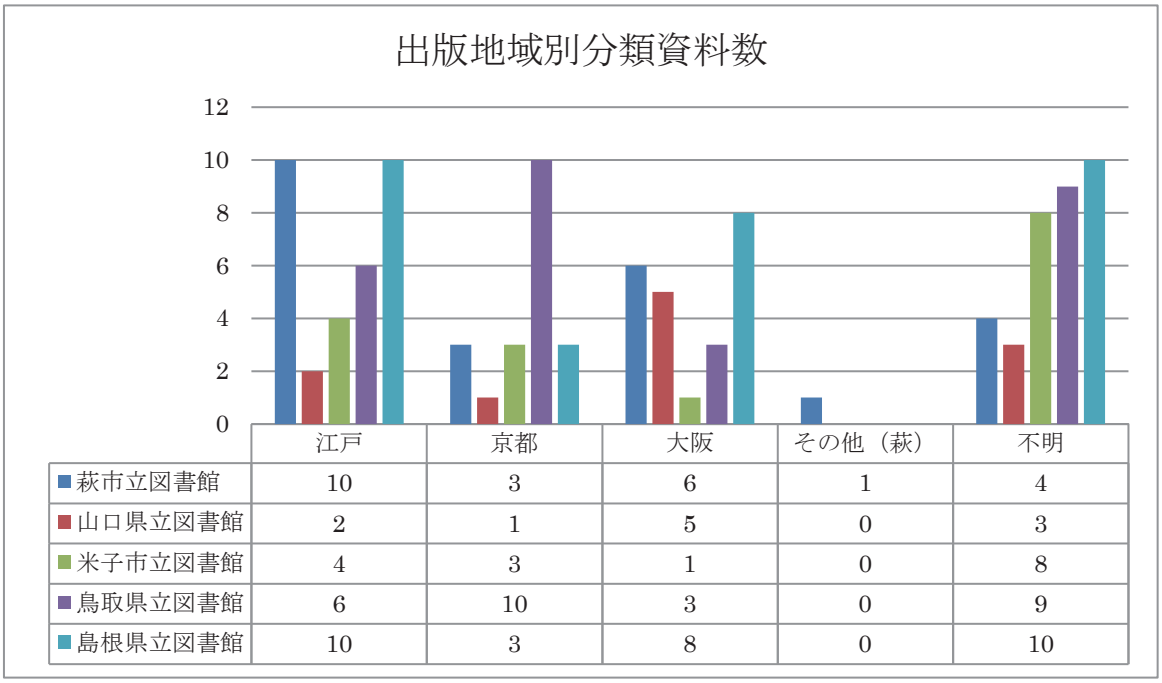
出版に関する記載のない不明と分類した資料は、『童訓往来新大成』【375－ト3】『聖代御江戸往来』【812－2】『天文図解』【6乙4－6】『女式目』【174－12】の４本である。

が10本、京都が３本、大阪が８本で不明が11本であった。江戸と関西（京都・大阪）の割合でみれば、江戸が約31.3%、関西が約28.1%である。

鳥取県立図書館所蔵資料を出版地域別の分類整理[6)]では、総資料28本のうち、最多は京都の10本であり、次いで江戸の６本、大阪の３本であり、残りの９本が出版地不明であった。江戸と関西（京都・大阪）の割合でみれば、江戸が約21.4%で関西が約46.4%であり、鳥取では島根に比して関西の方がかなり多い点が注目される。米子市立図書館所蔵資料では、江戸が４本、京都が３本、大坂が１本、不明が８本という結果であった。

同じ山口県でも、瀬戸内海側の山口市所在の山口県立図書館所蔵資料では、江戸が２本、京都が１本、大阪が５本で、不明が３本という結果であった。地理的

【グラフ２】



	江戸	京都	大阪	その他（萩）	不明
萩市立図書館	10	3	6	1	4
山口県立図書館	2	1	5	0	3
米子市立図書館	4	3	1	0	8
鳥取県立図書館	6	10	3	0	9
島根県立図書館	10	3	8	0	10

に近い京都と大阪の出版が合わせて６本と半数以上を占め、関西圏からの影響が大きかったことが予想される。

一方、日本海沿岸の萩市立図書館所蔵資料では、江戸が10本と最多で、京都の３本、大阪の６本と合わせた関西圏より若干多い結果であった。距離的に遠方である江戸で出版された資料が多数所在している点は特徴といえ、興味深い結果だといえそうである。

近世期の後半になると、関西圏だけでなく、江戸での出版が隆盛する。距離的な影響だけでなく、出版文化の拡大や流通といった要因も考えておく必要があるだろう。今回の萩市立図書館における調査では、総数24本中に10本もの江戸からの流入を確認することができ、それぞれの地域特性を考える上での貴重な報告といえるだろう。

６　まとめにかえて

萩市立図書館に所蔵されている近世期版本の往来物資料について、調査した概要を報告した。総数は24本であり、同じ山口県内で瀬戸内海側の山口県立図書館所蔵の11本より多くの資料を確認することができた。

島根県立図書館や鳥取県立図書館、米子市立図書館、山口県立図書館といった近隣の所蔵資料の状況と比較することが可能となり、目的別分類と出版地域別分類における共通性や相違点を確認できたといえるだろう。地域における特性の一側面を提示することにもつながったと思われる。

往来物の分布を通して、地域の教育的背景の格差や文化伝播状況などを解明することを目的としているが、本稿は、他地域の状況と比較する上で基盤となる調査の一報である。

紙幅の関係で本稿では、調査結果を整理して公表するにとどめ、資料の詳細な紹介は別稿に譲ることにしたい。従来、山陰地域の往来物資料は、『往来物解題辞典』にも記載が少なく、調査の空白地帯であった。残された課題について引き続き検討することとしたい。

注

１）『萩市立図書館所蔵　和漢古書蔵書目録』（平成６年３月、萩市立図書館）による。

２）『萩市立図書館所蔵　諸家旧蔵書籍目録』（平成７年３月、萩市立図書館）による。

３）拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について―関西文化との関係から―」（『関西文化研究叢書別巻　往来物の研究　第１輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年３月）、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考―近世期の京都観―」（『関西文化研究叢書別巻　往来物の研究　第３輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年３月）、拙稿「往来物の「女ことば」について」（『関西文化研究叢書　10巻』所収、武庫川女子大学関西文化研究セン

ター、2008年11月）、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について―東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月）、拙稿「国語資料としての『都花月名所』―江戸時代後期における漢字表記と振り仮名―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月）、拙稿「『南都名所記』についての一考察―山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性－」（『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月）等参照。

4）拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月）、拙稿「八戸市立図書館　旧遠山家所蔵の往来物について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月）、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年３月）、拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料―目的と出版地からの分類分析―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年３月）、拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料―目的別分類からの考察―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月）、拙稿「山形における江戸時代の書籍流通について―往来物資料の出版地域からの検討―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年３月）、拙稿「秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察―弘前・酒田・山形との比較検討―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第111号、2014年3月）等参照。

5）拙稿「富山県立公文書館所蔵の往来物資料について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第114号、2015年10月）、拙稿「高岡市立中央図書館所蔵の往来物資料について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第115号、2016年３月）、拙稿「長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の往来物―横山家文書からの報告―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第118号、2017年10月）、拙稿「新潟長岡「斯道館資料」の往来物について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第119号、2018年３月）、拙稿「新潟県立図書館の往来物資料について―目的別の観点から―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第120号、2018年10月）、拙稿「新潟県立図書館の往来物資料について―出版地域別の観点から―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第121号、2019年３月）、拙稿「石川県立図書館所蔵の往来物について―特殊文庫における調査報告―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第122号、2019年10月）等参照。

6）拙稿「島根県立図書館所蔵の往来物資料について―目的別と出版地域別の分類整理―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第125号、2021年3月）、拙稿「鳥取県立図書館所蔵の往来者資料について―目的別と出版地域別の分類整理―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第126号、2021年10月）、拙稿「米子市立図書館所蔵の往来物資料について―目的別と出版地域別の分類整理―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第127号、2022年３月）、拙稿「島根県立図書館所蔵の貝原益軒著作資料について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第128号、2022年10月）、拙稿「山口県立図書館所蔵の往来物資料について―目的別と出版地域別の分類整理―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第129号、2023年３月）等参照。

7）『国書総目録　第１～９巻』（岩波書店、1963～1976年）参照。

8）『古典籍総合目録　第１～３巻』（岩波書店、1990年）参照。

9）分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』（雄松堂、1988年）、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典　解題編』（大空社、2001年）、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典　図版編』（大空社、2001年）を参考とした。

【付記】

貴重な文献資料の閲覧や撮影、ならびに掲載許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、山口県の萩市立図書館の関係者各位に心より感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費助成事業 JSPS　KAKENHI（基盤研究（C）課題番号19K00620）の助成を受けた研究成果の一部です。

（2023. 7. 6　受理）